

京都大学
中院文庫本

遠情抄（宗祇未来記并雨中吟抄）

解題と翻刻

中村佳志
中島真理
三原尚子
中村健史

解題

中村健史

1

ここに紹介するものは、宗祇の手になる『未来記』『雨中吟』の古註釈書『遠情抄』である。

管見のかぎり『未来記』『雨中吟』の註釈としては本書がもっとも古く、したがって伝本の数も多い。『遠情抄』単独で一書成すもののほかに、諸種の歌書と合綴されてひろく流布し、近世期には「三部抄」「七部抄」の一として板行されるに至った。現在までに『和歌部類』（日本

歌学大系」別巻八所収）及び『和歌七部之抄』（京都大学蔵大惣本稀書集成」第十卷所収）所収のものが翻刻されているが、前者には一首分の欠落があり、後者は『未来記』序註に増補が加わっている。いずれも『遠情抄』の全貌を考えるうえではやや不満が残り、このたび改めて中院文庫本に拠って翻刻を紹介する所以である。

書名は一に『未来記并雨中吟抄』とも言う。『遠情抄』は一般にオンジョウショウと読まれているようだが、遊行寺本『遠情抄』には「エンセイ」の傍訓が見られる。なお中院文庫本が帙（後補）に「百人一首宗祇聞書附未来記 雨中吟」などとするのは識語を読みあやまったもので、もとより論ずるに足りない。底本の表紙題簽は剥落しているため、ここで

は識語に従って『遠情抄』の名に統一する。

2

中院文庫本の識語を私に書きくだして掲げる。

右は宗祇法師聞書なり。東常縁一覽の処、神妙の由を称し、遠情抄と号し、自ら銘を書き之を与ふと云々。此本は則ち彼の銘を押す所なり。先年講談の後、予聊か抄出の事有りと雖も、重ねて此本を借り請けて今書写せる者なり。

明応四年三月十八日 在判

禁裏御本に云く、逍遙院自筆の本を以て写せる者なり、と。

文禄四年二月廿日 自神武百数代末孫和仁^{廿五才}

右を要するに、宗祇の「聞書」に東常縁が『遠情抄』の題号を与え、三条西実隆が筆写したものが三条西家から後陽成院に伝わった。底本はその転写本である。なお明応四年は一四九五年、文禄四年は一五九五年にそれぞれあたる。

「和仁」は後陽成院の初名。

「宗祇法師聞書なり」以下の文章については、常縁の講釈を宗祇が筆記しそこに加証奥書を与えたとも、宗祇のつくった註に感心して常縁が『遠情抄』の題号を与えたとも、

解釈できよう。『大日本歌書総覧』は後者の解に拠り、伊地知鉄男氏「宗祇の古典研究」（『宗祇』所収）は『遠情抄』を「常縁から相伝した歌書」として前者の解に拠る。

この問題について、稿者は伊地知氏と見解を同じうするものである。左にその傍証となる一資料を掲げる。

『遠情抄』とほぼ同時代に成立した『未来記』『雨中吟』の註釈として素純『かりねのすきみ』（明応八年）が挙げられる。同書は「歌をよむ事いかやうなるべきぞや」「いかやうの歌を本として学ぶべきぞや」「一向あしきすぢにて不可用歌の様は何れぞや」という三つの論点について、それぞれ『詠歌大概』、『百人一首』、『未来記』『雨中吟』を根本とすべきことを説いたもので、内容的にはきわめて簡略ながら、たとえば『雨中吟』の題号と風体について

雨中吟と号する事、尤可^レ有^二心得^一義なり。名の外に体なく、体のほかに名なしとは、まことにかやうの事也。たとへば五月雨の日をへたるころ、南気などゝて、ぬるらかなる風吹きなやみて、人の心もはれぐしからず。ものむつかしく、野山草木のうへまでもしをれうらびれ、すくよかならぬさまを十七首の体にしたてたり。（……）あるは人におくれ、あるはうれへある人の詠じいだす哀傷、述懐などは、各別の事也。それにはあらず、詞とゝのほらず、いまはしくうちしをれ

たる様ある也。かへすぐ風体第一の事也。よくく
分別すべし。

とする説は、祇註の

此十七首は未来記同前には待れと、別に此名を雨中吟と号する事、尤可得其意子細在之。此書は名の外に躰なく、躰の外に名なしといへり。(……)たとへは霖雨物むつかしくうちおほふ様にて、(……)こゝちもたとくしく、山川草木の気色、鳥の声なともしほれたるやうの時あり。さやうの折ふしはあらぬ愁もそひて物いまくしき心ある也。(……)返く哥は風躰のあしきを嫌事也。(『雨中吟』序註)

のような記述とかさなる。

素純は東常縁の子にあたる。しかも『かりねのすさみ』冒頭に「古抄の口伝、家にたつる所のすぢをあらく語り侍りしを、同じくは鳥の跡にとめてと(……)書きつけ侍るものなり」と記されるところを見ると、『未来記』『雨中吟』について東家の説があつたこと、それが同書に引かれていような内容のものであつたことについては、ほぼ確実かと思われる。すなわちここに所謂「古抄の口伝、家にたつる所」が『遠情抄』とある程度の共通点を持つことは、常縁の講釈をもととして『遠情抄』が成つたとする説を裏書きするものにほかならない。(素純は明応四年に宗

祇から『伊勢物語』『詠歌大概』『古今集』の伝授を受けており、『未来記』『雨中吟』の説についても、常縁、宗祇、素純の系譜で伝つた可能性が考えられるわけだが、そのことは右を直接に否定しうる材料とはならぬゆえ、ここでは問題としない。)

本書の成立時期に関しては、井上宗雄氏「東常縁年譜」

(『東常縁』所収)が常縁による記銘を文明三年から九年の間(一四七一年～一四七七年)のこととしておられる。

『古今集』『百人一首』などの伝授時期からしても首肯すべき説であろう。このち文献の上に『遠情抄』の名があらわれるのは『実隆公記』明応元年十二月の条がもつとも古い。

今日宗祇法師定家卿未来記五十首、雨中吟十七首等読之、上原豊前守、四宮、斎藤々兵衛等来聴。(七日)

未来記聞書銘遠情抄、故東常縁自筆銘宛祇送之可染筆之由宗祇法師所望、仍書遣之。(十九日)

明応四年三月条に『遠情抄』への言及がないため断定はできないが、底本識語中にあらわれる「先年講談」が七日の講釈を指している可能性は高い。また両日の記事より、宗祇が『未来記』『雨中吟』を講ずる際の手控えとして『遠情抄』を用いていたことがわかる。なお近衛政家『後法興院記』によれば、宗祇は明応八年五月四日にも近衛邸で『未

来記』を講じている。

以上を総合すると、『遠情抄』は東常縁の講釈をもとにして宗祇のまとめた聞書であり、すくなくとも明応元年十二月以前、おそらくは文明三年から九年の間に一書として成ったものと推測される。

筆者宗祇はすでに周知の人物ゆえ、ここではその伝を略し、代りに三条西家歴代及び後陽成院と『未来記』『雨中吟』のかかわりについて、以下略述する。

実隆が宗祇に『未来記』『雨中吟』の講釈を受け、『遠情抄』の題簽を染筆したことについては先に触れたが、このほか『実隆公記』にあらわれる『未来記』『雨中吟』の記事は左のとおり。

永正二年八月九日、岩山道堅が『未来記』『雨中吟』を新たに写し、表紙をつけて持ってきた。同二十九日、丸雅連に『未来記』『雨中吟』の聞書を見せ（おそらく実隆の写した『遠情抄』であろう）、講釈をした。同九月二日、雅連から音物があつたので、返礼として『未来記』一冊を遣した。永正十七年十月八日、宗長に『未来記』など一冊を書いて遣した。大永七年十一月二十七日、肥前国住人志自岐縁定が周桂に伴われて来訪。『詠歌大概』の染筆を所望されたが、紙が余ったため『未来記』と『雨中吟』も書きくわえた。享祿四年六月二十七日、実世（実枝）の所望

によって『未来記』の春と夏を講釈した。天正三年閏正月二十七日、周桂から『未来記』の作者について質問があつたのでこれを説いたところ大いに喜ばれた。

実隆の註については、それが聖護院蔵『伊聞私』（公条筆記）の末尾二丁に書きとめられていることを日下幸男氏が紹介しておられる（『一華堂切臨『未来記雨中吟抄』（翻刻）』（『研究と資料』二九・三〇）参照）。内容としてはごく簡素な選歌註であり、実隆の講釈なるものは、おそらく『遠情抄』を前提としてそれを補うかたちで行われたものと推測される。また作者名について「貫之、躬恒ヲ兼タリ。ノ口伝、又貫躬ハ躬恒力時代ノ歌也とヲモヘハ貫之時分ノ歌ナリト云心也」とする説は、後述する宗養『三部抄』註とのかかわりにおいて興味深い。

公条の註については『百人一首』註と合写されたものが中院文庫に蔵されており（請求記号VI一三七）、本誌一六号に翻刻を掲載した。実隆のそれと異り全歌註であるが、基本的には祇註の踏襲で、『遠情抄』をほぼ全文引用した後、一部に自説を交えるのみである。祇註と自説の区別は取りたててしていない。

実枝関連の註としては『詠歌大概』の抄と合写されたものが中院文庫に蔵されている（請求記号VI九、北畠親顕写）。冒頭に「此鈔者三光院御本写也 又紹巴ヘノ聞書元

如加書之」と朱字で記され、本文中では「養抄」「巴抄」の紹介も見られる。識語のひとつに

逍遙院三条西殿御奥書

此抄者宗祇法師聞書、東常縁号遠情抄、書与銘云々。
予相伝之後、雖未出他所、感数奇之器量、所授之也。
努々不可許外見而已。

永正四曆仲夏日 亜槐拾遺臣

とあり、底本とは別系統の実隆写『遠情抄』をもととして増補を重ねた抄であるらしい。全歌註。なお右『詠歌大概抄』は、本稿において紹介する中院文庫本『遠情抄』と深いかかわりを持っており、この点については4章においてふたたび触れる。

公国、実条の註については、『国書総目録』などに拠るが、それらしい書名を見出すことができない。

実条在世中の文禄四年、後陽成院が実隆自筆『遠情抄』を筆写して、底本識語に言う「禁裏御本」をつくった。院には慶長十二年成立の『未来記雨中吟御抄』（列聖御集）所収）がある。全歌註。識語に

此未来記并雨中吟抄者、以遠情抄為根本、以師説加詞者也。愚鈍誤等睿智妙達之人可有改正者也。

と記すとおろ、この書もまた祇註のつよい影響下に成ったもので、「遠情抄を以て根本と為す」にあたって禁裏本『遠

情抄』が果たした役割には小ならざるものがあつたと思われる。なお後陽成院抄は後世たいへんに重んじられた註釈で、中院通茂『未来記雨中吟聞書（草）』（元禄十五年）では先行註の代表として、『遠情抄』と並んで引用されている。

3

『遠情抄』註説の特色について簡単に述べておきたい。
まず『未来記』部分について。序註において、宗祇は①「つゝかぬことをめつらしき詞とし心えぬことをふかきこととはりかほにいひ」、②「近き世の秀句ともをぬすみとりてそれを猶めつらしきやうにしいてたるとおもふ」という二つの観点から、『未来記』の歌を批判している。

①は、奇抜な表現や秀句を求めるあまり、表現に飛躍が多く、全体として意味が通じがたいことを指摘したもので、『近代秀歌』の「このごろの後学末生、（……）たゞきゝにくきをことゝして、やすかるべきことをちがへ、はなれたることをつゞけて」云々といった説にやや近いものがある。歌註で言えば

鶯の谷は谷の鶯をめつらしくせんとするにや。いりほかなるべし。（二番）

鴈をそのまゝよますしてあたらしくせんといひたてた

るも中くをろかにや。(二〇番)

等の指摘は、これを具体的な表現や歌材の扱いに即して述べた例である。また「つゝきされく」にして「さまいひおほせられぬ」「ことたらすこそ」など歌意の通じがたいこと、秀句が「見くるしく」「いりほか」であること、「よりつか」ざる歌材や「つきな」き詞を無理に一首のうちに詠みこんでいることへの批判も、同趣のものとしてとらえられよう。このほか

おもしろからせんとするほどに風情しとやかにもなく
なれる也。(二六番)

おもしろくあらんと心かへりて見くるしくや侍ら
ん。(三三番)

古躰ならんとはきにくき事をとり出、めつらしからんとはいひにくき秀句をこのむことをいましめんのため也。(三五番)

のように、「めつらしからせん」「おもしろからせん」とする詠者の心のありかたを「つゝかぬこと」「心えぬこと」と結びつけて論じようとする態度も目を引く。

他方②は、①が歌の表現、内容に関する論であるのに対して、本歌取の作法を述べたものであり、おそらくは『詠歌大概』の「近代之人所詠出」之心詞雖爲二句「謹可除棄之」に基くものと思われる。歌註では

寂蓮か袖に螢をつゝみてもといへるをめつらしくとりかへんとてつくりいへるさまなり。上手の哥を取かへんとせはかならずかやうに侍るへき物也。(四一番) かやうにまちかき哥ともをおそれずとる事可有憚者也。(四七番)

などと指摘されるが、特に四一番歌の註は、近代の「上手の哥」を取ることへの批判のほかに、それが「めつらしくとりかへん」とする態度と結びついていることをあげつらう点において、①と②を融合した論と見ることもできる。

①②以外では「詠歌大概にも雖為二句不可詠之由いへる詞也。結句三句までそのまゝいへる狼藉至極也」「慈鎮和尚家隆卿彼両首を上下に其まゝをけるさまのあまりにや」等の本歌取に関する言及、「すてに禁せらるゝ詞にこそ」「たゝ詞」「いひつゝけてみるにするゝときこえさる事第一きらふこと」など詞づかいや歌のしらべに関する指摘も、『未来記』部分には多い。

他方『雨中吟』については、「此書は名の外に躰なく、躰の外に名なしといへり」と説くとおり、同書を論ずる上で、宗祇は書名に含まれる雨の文字を重視する。たとえば序註には次のような記述がある。

此十七首の哥みな心たとくしく、理見えす、思とくもとかれず、たましく聞ゆるやうなるも心詞とをらす、

むすほゝるゝやうにあるを、雨中の心にたとへて雨中吟と云る也。

雨が降れば視界は遮られ、見通しが悪くなる。そのように『雨中吟』なる「名」を「躰」とした十七首は「みな心たとくくしく、理見えす」、「正路にはなくして首尾せぬ所」を持つ。八番歌註に「是より末九首みな其理きこえず。あやめもわかぬ哥とも也。其を雨中のたとへと覚悟すへき物とぞ」とあるのも同様であろう。歌意不通という点からの批判は『未来記』部分にも存在はしたが、全体として見ればやはり宗祇における『雨中吟』観の一特色と言うべく、「惣の心わきかたくて物むつかし」「一首の建立又理なし。雨中吟の至極也」「惣の理もたしかならず」等歌註のなかでの言及も多い。

あるいはまた、雨が降りしきると人は鬱屈した暗い気分を懷きがちになる。それと同じく『雨中吟』には「むすほゝるゝやうに」「心伸くもりはてゝ物くるしくいまはしき」歌が多い。このことは同書が詞づかいや表現よりも、風体の点で悪歌の例になっているという考えを導く。すなわち「風躰のあしきをしらしめむのをしへなり」「返く哥は風躰のあしきを嫌事也」（序註）といった記述は、陰鬱で不吉な「哥さま」を「風躰のあしき」ととらえる発想を前提とするものである。歌註における例としては次のよ

うなものが挙げられるだろう。

ことに下句の様うれはしき躰也。（一番）

物うらめしく、愁わひたるやうにこそ侍へけれ。（…）

…此哥いまはしき哥の風躰也。（二番）

たゝ山ふかく居て愁へしほたれつゝかひなき心のさま雨中吟也。たゝ哥のさまはれくしからぬを嫌也。（一番）

このほか、序註における「後生の人はみな詞をめつらしく、心をふかくと案する所、正路にはなくして首尾せぬ所あるへき」といった指摘は、『未来記』①との関係から興味深い。たとえば一二番歌について祇註は次のように記す。

色くれてしかるへからさること葉とぞ侍し。秋の松風もよろしからすこそ。かなしきさまをはいへと心はさらにあはれならず。惣て此抄にいへることは一ふしあらんといひいて又心の興あらんとする所、相構かやうに詠すへからさるよし代々の庭訓也。

詞の新しさ、心の深さを求めるあまり、「色くれて」「秋の松風」のような奇矯な詞づかいが生れる。「かなしきさまをはいへと心はさらにあはれならず」とは、詠者の意図においては悲しいさまを詠もうとしていたにもかかわらず、できあがった歌は読者にそれを感じさせるようなもの

ではない、という意であろう。文脈から言つて、宗祇がかかる齟齬の原因を「色くれて」「秋の松風」のような表現、ひいてはそうした表現を導く詠者の心がまえに求めていることはあきらかである。

このような論理の展開は「古躰ならんとはきゝにくき事をとり出、めつらしからんとはいひにくき秀句をこのむことをいましめんのため也」といった『未来記』部分におけるそれとかさなる。「おもしろからせん」「めつらしからん」「一ふしあらん」「興あらん」とする態度が悪歌を生むというのは、いわば『遠情抄』全体に通ずる宗祇の基本的な態度なのである。室町から江戸にかけての和歌が「およそ、面白がらせることに神経質」であつたことについては大谷俊太氏「面白がらすのは面白からず」（『文学』三一）の論があるが、『遠情抄』における右のごときありかたもまた、氏の指摘と軌を一にする部分を持つのではないだろうか。

その一方で『遠情抄』には『未来記』と『雨中吟』を対照的にとらえている面もある。先にも述べたように『未来記』部分における宗祇の説は、①奇矯な表現や秀句から生ずる問題、②作法に反する本歌取、への批判を主としていた。①についてはいうまでもないが、「近き世の秀句ともをぬすみとりてそれを猶めつらしきやうにしいてたると

おもふ」と難ぜられる②もまた、ごく大づかみに言うならば、詞や表現についての指摘にほかならない。

むろんこのような関心は『雨中吟』にも引継がれてはいる。三番歌「さむる枕」、一二番歌「色くれて」、一七番歌「木枯の風」といった措辞に対する言及はその好例と言うべきであろう。しかしながら、たとえば「詞つかひ句のうつりなとはさしてとかなし。只さまのあしきにより物わひしくきこゆる也」（九番）といった評言からうかがえるのは、『未来記』とあきらかに異り、風体の批判に力点を置こうとする態度である。序註の冒頭に、

此十七首は未来記同前には待れと、別に此名を雨中吟と号する事、尤可得其意子細在之。此書は名の外に躰なく、躰の外に名なしといへり。躰とは哥の風躰也。此躰を雨声暗^冥の躰とも云り。風躰のあしきをしらしめむのをしへなり。

と示されるとおり、『雨中吟』への批判は風体への着目という点において『未来記』から差別されていた。「此十七首は未来記同前」とは、忌避すべき悪歌の見本という点で『未来記』と『雨中吟』が共通の性格を持つことを指すものと思われる。だが宗祇は、かかる前提に立った上でさらに「別に此名を雨中吟と号する事、尤可得其意子細在之」と言い、特に風体という観点から『雨中吟』を難じようとする

る。ここにおいて註者が、両書のあいだに共有されざるもの、おのおのに独自なものを見出し、それを手がかりとして『雨中吟』を論じようとしていることは、まず疑いをいれないところであろう。もとより『遠情抄』の記述は、たとえば北畠本『詠歌大概抄』において「未来記ハ詞ノ悪キ也 雨中吟ハ風躰ノ悪キ也」と示される紹巴の説ほど徹底したものではない。『未来記』『雨中吟』それぞれの特色を対照的にとらえんとする意図はあるにせよ、両書の名を挙げて、比較し、対比するところまで踏みこむことのない祇註を、紹巴のそれと同列に論ずることには無理がある。だが、かかる発想のすくなくとも萌芽が宗祇のうちになかったとするのであれば、それもまた正確とは言えない。この点については、『兼載雑談』における次のような記述が注目される。

未来記の歌は、かけり飛び廻したる体なり。雨中吟の歌は、余りに案じ過して理の裏をよめり。

「かけり飛び廻したる体」とは『未来記』における飛躍の多い詞づかい、所謂「入ほか」の秀句を指すものかと思われる。『遠情抄』の「つゝかぬことをめつらしき詞とし」「つゝきされくにして」といった評に近い。また「余りに案じ過して」にあたる記述は祇註のうちに見られないが、「理の裏をよめり」は「一首の建立又理なし。雨中吟の至

極也」のように歌意不通を『雨中吟』の特色としてとらえる発想と一脈相通するものがある。

だが兼載の意とするところは、何よりも「未来記の歌は……、雨中吟の歌は……」という文章の構造そのものにあらかである。なるほど『未来記』の表現に対して『雨中吟』の「理の裏をよめり」を挙げるあたり、『遠情抄』と『兼載雑談』のあいだには微妙なくい違いがある。しかし両書がそこに収められた歌の特質において、比較され、対比されるべき存在であるという考えかたそのものは、兼載のうちにあってゆるぐことのない前提であった。そして祇註とほぼ同時代にこのような認識があったことは、先に触れた『雨中吟』序註の記述とともに、『遠情抄』を考えるうえでやはり重視されねばならない。宗祇においても兼載とさしてへだたることのない『未来記』『雨中吟』観——ある面においては『未来記』と『雨中吟』を対照的にとらえるという——を抱いていたとするのが、もつとも自然な推測ではないだろうか。

なお本文中に先行註からの引用は見られないが、『詠歌大概』『未来記』一番、『近代秀歌』(同二〇番)、『毎月抄』(同二四番)を引いて論の裏づけとした部分がある。このことについて、最後に一言触れておきたい。

宗祇は和歌初学の人が読むべき書物について次のよう

に述べている（『老のすきみ』）。

道の為に見待るべき物は、正風体・秀歌体大略・百人一首・秀歌大鉢・近來秀歌・未來記等なるべし。

だが、『未來記』を「見」ということは、『正風体』以下を「見」るのは質的に異なるとなみではないだろうか。悪歌の見本としてつくられた『未來記』は、単にそれを読み、理解するだけでは、歌道稽古の上で意味を成さない。テキストそのものを相対化し、批判的に享受するための視点を持たないかぎり『未來記』『雨中吟』を「道の為に見」ることは不可能なのであつて、それゆえこれら二書は、いわばみずから否定するための書物——そこに収められているのが悪歌であることを保証してくれる書物——を常に必要とする。すなわちそれが、『詠歌大概』『近代秀歌』『毎月抄』といった、いかにして秀歌を詠むか、何が秀歌であるかを説いた書物にほかならない。

『遠情抄』における引用は、『未來記』『雨中吟』が『詠歌大概』等と同じく定家の真撰と信じられていた事情のみならず、両書の特殊な性格を考えあわせる必要がある。

4

底本の書誌は以下のとおりである。京都大学附属図書

館中院文庫藏。請求記号VI一四七番。写本一帙一冊。横型袋綴。縦一四・七cm×横二一・五cm。薄茶色表紙。表紙に題簽の跡が残るが剥落して存しない。本文料紙は楮紙で、見返も本文共紙。全百二十二丁。『百人一首幽斎抄』と合綴されており、各々別に奥書を持つ。墨付の丁数は『幽斎抄』が百丁、『遠情抄』が十九丁。『遠情抄』の識語は先に掲げたとおりだが、参考までに『幽斎抄』のそれを左に示す。

此百人一首之注釈近代往々在之。或繁或略或異或同。仍難一決。而此百首者道之所伝和哥之骨肉学者之肝心云々。依之且任師説又加取捨為一冊。作者之系譜等也足軒被勘加之。依繁多略事等在之。未決之事者暫闕之。連々閑暇之時猶可補之而已。

于時慶長元年臘月天晦日對雪夜之寒灯敲窓下
之凍硯記之 一見之次 丹山隱士 在判

書写の事情を示す奥書はない。ただし底本は『幽斎抄』『遠情抄』本文の行間に細字で諸家の説が補記されており、そのなかには「寛永四三十五宵」「寛永八十二月御講」「百人一首」八〇番、「元和八五廿七 氏一御講」「未來記」序のごとき日付を含むものがある。これらの手跡は本文と一筆で、時期を分けて後補されたものとは思えない。それゆえ書写の年代はすくなくとも寛永八年十二月以降と推

測されよう。書写者は不明。なお『幽斎抄』には細字書込の付箋が付されているが、『遠情抄』にはない。全丁の画像が京都大学電子図書館のホームページ上に公開されている (<http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/index.html>)。

管見に入った『遠情抄』の諸本は、底本のほか宮内庁書陵部蔵『松藤』合写本（対校本、五五八―九〇）、宮内庁書陵部蔵『三部抄』合写本（五〇―一四八七）、内閣文庫蔵（二〇―一五八四）、土佐山内家宝物資料館蔵『詠歌大概』ほか合写本（ヤ九一―一四一）、遊行寺蔵本、宮内庁書陵部蔵『三部抄』合写本（五〇―一四九五）、宮内庁書陵部蔵『三部抄』ほか合写本（五五八―九一）、肥前松平文庫蔵『三部抄』合写本（二一七―四三）の八種（対校本以外は国文学研究資料館所蔵のマイクロフィルムを利用）。本文の内容から原撰本系と増補本系の二種に大別すれば、底本及び前五本が原撰本系、後三本が増補本系に属する。両系統とも歌註に目立った異同はなく、『未来記』の序註末尾に次のような段落が加えられているのが増補本系の特色である。「大惣本稀書集成」所収の本文に拠って示す。

此各作者つくり名也。得業生とは、天子より学問寮を給りて及第するを文章得業生と云也。紀伝儒者とは、高辻・坊城殿、これらを申也。明法とは、外記官務の

類を云也。算道とは、律令格式を云也。明経とは、五経に二経を加へて読を云也。周易・礼記・毛詩・尚書・左伝此外に、周礼・儀礼を加へて七経也。明経とは則高辻・坊城殿を申也。和哥得業生と云は無事也。貫躬は貫之の風かと思へは、又躬恒か風也。又人丸の風もあり。此心を以て作者をつくらるゝ也。儒者に比して和哥得業生と書なり。

一見して明かなように、右は原撰本系序註に言う「此作者柿本貫躬とかける事」の「口伝」が筆記、増補されたものである。増補本系『遠情抄』の成立が宗養註「三部抄」と深いかわりを持つことは、すでに土田将雄氏『細川幽斎の研究』及び藤原英城氏「大惣本稀書集成」解題の指摘するところだが、右に引用した増補部分は宗養による序註全文と完全に一致し、おそらくは宗養註が『遠情抄』に取りこまれたものと推測される。

原撰本系六本のうちでは遊行寺本に多く異文が見られるが、そのほかの諸本で大きな異同は存しない。しかして底本及び対校本のみが行間の細字書込を持つ。

翻刻に校異を示してあるので、くわしくはこれを参照いただきたいが、記号の使いかた、漢字の宛てかたなど、対校本は底本ときわめて近い内容を有する。その先後関係については、『百人一首』八〇番歌への書込が両書で

人の契置心の長くとも短くとも治定をしらは一方に思さ
たむへきを不^レ知故ふかき歎也 用 寛永四三十五宵

(対校本・書陵部本)

人の契置心の長くとも短くとも治定をしらは一方に思さ
たむへきを不^レ知故ふかき歎也 用 寛永四三十五宵

寛永八十二月御講 此義不穩之由也

(底本・中院文庫本)

となつている点、また誤写の訂正、朱筆による訓読記号の
追加(『雨中吟』序書込②参照)などからして、おそらく
は対校本が底本の親であろうと考えられる。なお対校本の
識語は底本のそれとほとんど一致するものであるが、末尾
に「寛永七年極月廿五日夜一校」なる校合奥書を持つ点
が異り、これによつて書写年代を知ることができる。

先にも触れたように、底本及び対校本の特長は行間の
細字書込にあると言えよう。これらはいずれも本文と同筆
で、引用元を漢字一字で略記しつつはびひろく諸家の説を
紹介しており、出典をあきらめえたものを見るかぎりでは
室町末期から江戸初期にかけての註釈類がその中心を成し
ている。同じく「三部抄」の註とはいいながら、まったく
成りたちることなる『幽斎抄』と『遠情抄』が合写された
ことの背景には、もつとも一般的な註釈を本文とした上で
諸説を収集せんとする筆写者の態度をも、考えてみる必要

があるのかもしれない。

なお、「用」「朶」などそれぞれの略称がいかなる人名、
書名を指すかについて、底本及び対校本中にまとまった記
述は見られない。以下、他書との対照などから引用元が判
明したものについてはその旨を付記しつつ、『遠情抄』部
分に登場する出典略記を列挙しておく。

無表記の書込。おそらく筆写者によるものと思われる。
本文で言及される和歌、詩文の引用が中心で、自説を述べ
ることはしない。

「異本」。『遠情抄』の異本、もしくは『未来記』『雨中吟』
の古註で当時『遠情抄』の異本と信じられていた書物から
の書込であろうとは思われるが、管見のかぎり底本のそれ
と一致するもの見出すことができなかった。『百人一首』
部分には登場しない。

「氏」。中央に朱線が引かれており、人名であることがわ
かる。出現回数が多く、内容的にも和歌、漢詩文をはび
ひろく引用して、相当の教養を持つ人物である。『百人一首』
部分には登場しない。『未来記』序註書込⑥に「元和八五
廿七 氏」御講」とあり、『雨中吟』序註書込①に「氏云
亡父ナトハ……」とあるところを見ると、元和八年(一
六二二年)当時壮年期にあった歌道家の人らしく、「氏云
いさゝハ秋か不知トノ詞也ト 然御説ト也」(『未来記』

一六番)の「然」(人名)が素然中院通勝であるとすれば、彼と交際のあった水無瀬氏成などが候補として考えられる。水無瀬氏成は元龜二年十月二十七日生、寛永二十一年九月十七日卒。水無瀬兼成の子、三条西公条の孫にあたり、中院通村の歌集によつて通勝、通村と親しい交際のあったことが知られる。なお氏成のまとまった歌論としては『二根集』にその一部が収められるのみであるが、本書における書込と重なる内容は見出せなかった。

「成」。人名。『未来記』三四番に清濁についての説が一度あらわれるのみ。

「然」。人名。前述のように『未来記』一六番に「氏云いさゝハ秋か不知トノ詞也ト 然御説ト也」とするのが唯一の例。ただし『国書総目録』を見るかぎり、中院通勝に『未来記』『雨中吟』の抄はない。日下幸男氏編『中院通勝歌集歌論』にも右のような説は見出せなかった。

「北」。人名。「氏」と並んで引用が多いが、『百人一首』部分には登場しない。左のように註説の内容が中院文庫蔵『詠歌大概抄』(北畠親顕写)に合写された『未来記』『雨中吟』の抄と一致するところから、「北」は北畠親顕の略称と知られる。

『未来記』三番

北菅ノ子ノ日シテト侍取分不可然(底本)

菅のねの日シテト侍取分不可然(北畠本)

『未来記』二七番

北・片敷の袖と侍ランヲ又サカサマニヨメリ(底本)
片敷の袖と侍らんを又さかさまによめり(北畠本)

『雨中吟』八番

北 題ヲマワシテヨムナト聞テマワス様ヲモ不習
大略如此也(底本)

題をまはしてよむなと聞てまはすさまをも習はす
大略如此よむ也(北畠本)

北畠親顕は慶長八年九月二十八日生、寛永七年八月一日卒。中院通村の実弟にあたり、書写活動などを通じて兄の学問を支えた。

なお「北」なる略号は、書込を行った人物が三条西実枝の註説を北畠本『詠歌大概抄』によつて読みうる立場にあったことを示唆すること、言うまでもない。時代はくだるが、中院通茂『未来記雨中吟聞書草』も北畠本を引用する際に「照高院抄」——照高院は親顕の院号高照院の誤り——として出典を註記している。

照高院殿抄に、飛鳥のあすかといへる、いつもある事なれと、あすかややよひのむやりさらにきゝよからす云々。『未来記』一〇番

このような態度からは、中院家周辺において同書が北畠親

頭(カビ)の註として享受されていた可能性も考えられ、底本の筆者(カビ)を考えるうえできわめて興味深い。

「巴」。人名。『百人一首』部分には登場しない。『未来記』一〇番で本歌として「北へ行鷹そなくなるつれてこし数はたらでぞ帰るべらなり」を挙げて「巴引」とするのが唯一。おそらく里村紹巴のことと思われる。ただし前述北畠本『詠歌大概抄』には相当する記述が見られない。それ以外からの引用であろう。

「用」。人名。『遠情抄』では『未来記』三四番に「(一夜たゝ)は」スム也 終夜ノ心也」とあるのみだが、『百人一首』部分ではしきりにその説が引用されている。先にも触れたように『百人一首』八〇番歌の書込から「用」が寛永四年三月十五日と八年十二月に講釈を行ったことが知られるが、管見のかぎり当時の日記、記録類に右の日付と一致する講釈は確認できず、今のところだれを指すか不明。ただし『百人一首』七番歌「あまのはらふりさけみれば春日なる三笠の山に出し月かも」(安倍仲麿)に対する

用 土佐日記あをうなはらふりさけみれば 是天ヲ仰事ニアラズ 振放 万ニホシイマ、ノ心也

といった記述を見ると、「ふりさけみれば」を「天ヲ仰事ニアラズ」と解するのは三条西家系統の説として当然ながら、『土佐日記』『万葉集』を引いて「ホシイマ」とす

るあたり、

土佐日記に青海原ふりさけみればと貫之かけり。なほ当流には、振放ともかく。放はほしいままとよむ也。

(『後陽成天皇御抄』)

後十鈔云、箋云、師云(……)フリサケハ提也。我物ニシテ見ル義也。万ニ振放ト書リ。放ハホシイマ、ト読字也。(……)万三、長歌、スルカナル フシノ高根ヲ 天原 振放ミレハ ワタル日ノ 影モカクロヒ
——云々。(『後水尾院御抄』)

のような註の影響が考えられる。なお「後十」すなわち中院通村は寛永四年及び八年当時健在で、『大日本歌書総覧』によれば『未来記』『雨中吟』の註もあつたらしい。通村と「用」との関係については今後さらに検討を加えてゆく必要がある。

「官」。書名。『未来記』の作者名に傍書して「儒者ニ比テ書之」とする。前述宗養「三部抄」註の「儒者に比して和哥得業生と書なり」という記述と対応するところから、同書の別名『和歌輅轄』の略称と思われる。

「朶」。人名。『百人一首』部分にもあらわれるが、清濁や発音に関する説が多く、人物を特定するまでには至らなかった。『遠情抄』では『未来記』序註の部分に「得業生」を「トクゴウノシヤウ」と読む説が書込まれているのみ。

「正」。朱線はなく、人名書名のいずれであるか不明。『百人一首』部分には登場しない。『未来記』序註で「忍ふ山忍ひてかよふ道もかな人の心のおくも見るへく」という歌を引用するのが唯一だが、管見のかぎり『未来記』の古註釈でこの歌を引用するものはほかに見出せなかった。

以上のように書込についてはいまだ不明な点が多く、さらに後考を俟ちたい。

「付記」本稿は四人による共同研究の成果であるが、解題は代表して中村健史が記した。

(なかむら けいし・本学文学部学部生)

(なかしま まり・本学文学研究科修士課程)

(みはら なおこ・本学文学研究科修士課程)

(なかむら たけし・本学文学研究科博士後期課程)

翻刻凡例

1. 翻刻に際しての凡例は、以下に特記するものを除いて前稿「京都大学
中院文庫本三条西公条講未来記雨中吟聞書」(本誌一六号掲載)のそれを踏襲する。
2. 解題で述べたとおり、底本は京都大学中院文庫蔵本(VI一四七)、対校本は宮内庁書陵部蔵本(五五八—九〇)である。『遠情抄』以外の部分は省略した。
3. 句読点は私に施した。
4. 記号の処理と朱墨の別の表示は以下のとおりである。
 - a. 朱字は本文と書込とを問わずゴシック体で示した。
 - b. 人名・書名・地名を示す朱線は翻刻しなかった。
 - c. 朱筆による漢文訓読記号は、文字をゴシック体で、傍線等を二重線で示した。
 - d. そのほか朱による記号のうち、特に必要と認められるものは【校異】の欄に註記した。
5. 国歌大観番号は被註歌の末尾に()で示した。
6. 【書込】欄において書込の位置を示すために丸数字を用いた。行間に書込まれたものについては、書込の左側にある本文の行の先頭の文字に丸数字を付してある。
7. 【校異】欄において校異の存する本文行数・書込の丸

数字番号（6参照）は□囲いで示した。

金玉集 和歌得業生柿本末成撰

金玉集一卷

公任卿撰之 八世孫附

未来記

前和歌^{①トクゴウシヤウ}得業生柿本貫躬

此書を未来記と号する事は、後生の輩哥を詠する事ふるきすかたのたけたかく優にしてたゞしく又あはれふかきさまをはこひねかはすしてたゞあたらしくよみ出んとするゆへ、やゝもすれはいりほかに事過又は心ことはとゞかすして、正風の事はいふにをよはす変風のさかひまでも及はす、つゝかぬことをめつらしき詞とし心えぬことをふかきことはりかほにいひ、又近き世の秀句ともをぬすみとりてそれを猶めつらしきやうにしいてたるとおもふ心をふかくなしみて、京極黄門定家卿後学末生の心をかゝみてかくのごとくよみ出ていましめとし給へる者也。仍此作者柿本貫躬とかける事可受口伝者也。^{③④⑤⑥⑦}

【書込】①官 儒者ニ比テ書之（左傍）

②か本（右傍）

乱^{乱云々}（余白）

④忍ふ山忍ひてかよふ道もかな人の心のおくも見るへく正（余白）

⑤おもふてふ人の心のくまことに立

かくれつゝみるよしもかな（余白）

⑥元和八五廿七 氏一御講（余白）

⑦得業生^{トクゴウシヤウ}

⑧「正」の前に「・」なし

【校異】③ふるき―長点が補入記号になつてゐる（宮書）

③信之―信之（宮書）

・としの内に春はきにけり一とせにふたゝひかすむ四方の山のは（一）

此歌は古今の巻頭なるうへ詠哥大概にも雖為二句不可詠之由いへる詞也。結句三句までそのまゝいへる狼藉至極也。一とせに二たひかすむもあまりなるにや。世ををそれぬ人のしいつへき所を曳（か）ゝみいへるなり。

【校異】**2** 東 (か) 〽 みーかゝみ (宮書)

・うち出る涙の水ときは山声に色ある鶯の谷 (2)

これは鶯の涙の水うちとけてふるすなからや春を知らんといふ本哥をとれり。本哥^①はあたらしく幽玄なる哥也。涙の水ときは山とつゞくこと秀句以外よろしからず。鶯の谷は谷の鶯をめつらしくせんとするにや。いりほかなるべし。

【書込】^① 谷川の打出る波も声たてつ鶯さそへ春の山風 (行間)

【校異】**1** 「・」なし (宮書) **1** 鶯—鶯 (宮書) **3** 鶯—鶯 (宮書)

・たか春といはもとすけの子日してひくまのへの松の一しほ (3)

此哥一句つゝ見侍れはつねのことはにてさらにとかなく侍るを、たゝ秀句にむすほゝれてつゞけやうのあしきゆへにことの外になる物也。惣の心無心所着の哥のことく更に落着なく侍にや。たゝめつらしからんと思ふゆへ也。

【書込】^① 北菅ノ子ノ日シテ侍取分不可然 (行間) ^② 春霞たちかくせとも姫小松ひくまの野へに我は来にけり (行間)

^③ ひくま野 遠江国ニあり・ひくといふえんより霞のうちをも尋もとめてひくとにや (行間)

【校異】**1** 「・」なし (宮書) **2** たちかくせとも—たちなかくせとも (宮書)

・きえかての白雪青きわか草にをみの衣をきたる御かり場 (4)

しら雪あをき先以外のつゞき也。をみの衣をきたる御かりはといへる此小忌の衣はきる事おりくにかはる事侍るにや。いづれも神祇たるへし。かりはにをみの衣きたるときかす。たとへはをみの衣とは地のしろきに青すりをしたる物也。若草の雪にもえ出たるを小忌衣にゝせたるさらにつきなくや。一向哥のすかたにあらず。尤以可憚躰也。青といふ詞又よろしからず。

【校異】**1** 「・」なし (宮書)

・時しあれは曉かけて鶯の声を人やおるらん (5)

此哥は待人もこぬ物ゆへに鶯のなきつる花を折てける哉といふ古今の哥をとれり。本哥は優にやさしささま也。大略^①その心ながら曉かけて人やおるらん入過たる心也。五もしの時しあれはも心たらず。時しもあれとこそいふへきを如此いへるよろしからず。

【書込】①・異本・余二風情過テ正躰ヲ不知也 此体コト二有ヘキ様也 コレヲハ見エガタクテ人思アヤマルヘシ (行間)

【校異】①「」なし (宮書)

・桜花よもの山のはさきみちてふしのすかたににほふ白雲 (6)

此哥は毎句のつゝきされくにしてさまも又こと過たる也。末代の哥はいかにも入ほかにさまのすき侍るにこそ。富士^①のすかたに匂ふあまりなるにこそ。こしのしらねに春風そふくを思ひていへるにや。又家隆卿の山のすかたをおもふにや。^②

【書込】①みよしのゝ花の盛をけふみれはこしの白ねに春風そふく 俊成 (行間) ②桜花さきぬる時はかつらきの山のすかたに

かゝる白雲 家隆 (行間) ③北 近代ノ作者ノ名哥ヲ取事スヘテ不可然ト也 (余白)

【校異】①「」なし (宮書)

・吹渡る雲の梯とたえせすちるかよしのゝ峯の桜木 (7)

花^①のちるを雲のかけはしととりなすにや。あまりにそきこえ侍。桜木とゝまるもよろしからずとぞ。

【書込】①・異本・吹渡ルモ風ナクシテヨム事ハ神^①なひの三室の山の葛かつらうら吹かへす秋はきにけり是ヲウラヤムニヤ 風情過

テ見ユル也 (行間)

【校異】①・吹渡る――吹渡る (宮書)

②よろしからずとそ――よろしからず (宮書)

・けさ霞よしのゝ麓立こめて天つ空ゆく花のしら雲 (8)

けさ霞といひ出たる先よろしからず。今朝のあさけなといふはおなし事かさなれと、優にこそ侍れ。思ひわきまふへし。
よしのゝ麓もをしつけたることはにや。下句又あまりにそ侍るへき。

【校異】①「・」なし（宮書）

・里の名に昔をとへは山吹のこたへぬいろの露の玉つさ（9）

これは山吹のこたへぬ色に露おちて里の昔はとふかひもなしと侍をとれる成へし。露の玉つさ又いふに及はすや。

【校異】①「・」なし（宮書） ②山吹の—山吹の（宮書）

・春は北秋は南へとふとりのあすかや三月くれてゆくらん（10）

鴈をそのまゝよますしてあたらしくせんといひたてたるも中／＼をろかにや。あすかやゝよひといいるうつり又いひおふせずこそ。

【書込】①^前北へ行鴈ぞなくなるつれてこし数はたらでぞ帰るべらなり 巴引（行間）

【校異】①「・」なし（宮書） ②うつり—うへは（宮書）

・夏のきてうの花白くぬきかふる衣ひるらし天のかく山（11）

かの衣ほすてふ天のかく山といふ名哥をそのまゝにてひるらしといひかへて詮としたる。詞ことにみくるしくや。夏のきておもはしからずこそ。

【校異】①「・」なし（宮書）

・郭公なくや五月の夜のほとをあかしやかねのこゑもほの／＼（12）

此三の句無下のたゝ詞也。四五の句沙汰に及はざるにや。

【校異】①「・」なし（宮書） ②四五の句—四五句（宮書）

・おもふへし花橘の軒ふりて昔にたとる袖のかの夢 (13)

まつ五もし心ゆかす。下句夢もむかしの袖の香そするといふを袖の香の夢とつゝけたる、心も詞も詮なくや。

【書込】①・異本・是も橘の匂ふあたりのうたゝねは夢も昔の袖の香そするト云哥ヲトレリ (行間)

【校異】①「・」なし (宮書)

・鐘くらき野寺を杉の木のみより山時鳥声のおちくる (14)

まつ鐘くらきの五もしよろしからず。野寺を杉も如何。木のみより郭公の声のおちくるもわさとかましくや。風情過て詞のつかひやうよろしからず。

【校異】①「・」なし (宮書)

・五月雨にふなちも遠くたつ波のをのれたゆたふしかのおほわた (15)

志賀の海などはしつかなるさまにいひてこそ所にも (に) あひ侍れ。をのれたゆたふ事といひたる心も詞もよろしからず。五月雨に舟路のとをくなる事もことゆかすや。

【校異】①「・」なし (宮書)

・これは秋かいさゝむら竹そよこよひ夏ともつけよふし待の月 (16)

五もしこれは秋か以外のたゝ詞也。いさゝむら竹とつゝく秀句又よろしからず。そよこよひもきゝにくし。おもしろか
らせんとするほどに風情しとやかにもなくなれる也。

【書込】①・氏云、いさゝハ秋か不知トノ詞也ト然御説ト也 (行間)

テ事過ル也 (行間)

③ 新古今三 鳥羽にて竹風夜涼といふ事を人々つかうまつりしとき 春宮権大夫公継 まとちかきいさゝむら竹
風ふけは秋におとろく夏のよのゆめ (行間)

【校異】①「・」なし（宮書）
②「・」ともになし（宮書）

・とまれかし行かたしらぬかやり火の烟そ空にみちのたひ人（17）

旅人の用さらによりつかすや。烟そ空にみちのなとつゝきたる又よろしからず。

【校異】①「・」なし（宮書）

・やよいかななかめのそらも夏かけて玉ほこしろき露の夕かほ（18）

此上三句はいさゝむら竹のたくひ也。玉ほこしろき以外の事にや。露の夕かほもさしてこのまじからず。夕かほの露とこそあるへき物には侍れ。

【書込】①やよやまで山ほとゝきすことつてむー（行間）

②やよ時雨物おもふ袖のなかりせはー

【校異】①「・」なし（宮書）

・夏衣木々の林の枝つゝきをちこちとよむ蟬のもろ声（19）

夏衣木々もいかにそや。又木々の林の枝つゝき、あまりにとりこみてきゝよからず。遠近とよむもこと過侍（る）にや。

【校異】②きゝよからずゝきよからず（宮書）

②侍（る）ー侍る（宮書）

【校異】①「・」なし（宮書）

・いつみ河千とせの命いくしたてみかのはらふく風そすゝしき（20）

いつみ河ちとせのつゝき先よろしからず。命いくしたてにくき風情也。みかのはらふく又きゝよからず。田夫の花のかけをはなれ、商人の衣布衣のみともいひつへし。いくしは五十の串なり。

【校異】①「・」なし（宮書）

・しつのめかをるや衣のあさ明に袖もまとをの秋の初かせ (21)

をるや衣のあさとつゝけんためにや。よろしからず。あさ明、又このましからず。袖^①もまとをのもつゝきおほつかなし。
おさをあらみといひてこそ本哥にもかなひ侍へけれ。

【書込】①すまの海士の塩焼衣おさをあらみ (ま) 遠にあれや君かきまさぬ

【校異】①(ま) 遠―ま遠 (宮書) ①きまさぬ―きませぬ (宮書)

・さ筵にかたしきかぬる夜をさむみいまや衣をうちのはし姫 (22)

かたしきかぬる夜をさむみ、よろしからず。下句又以外の詞にや。かやうのたくひいくらもありつへき事也。よく／＼
かへり見あるへき物哉。

【校異】①「・」なし (宮書) ③哉―也 (宮書)

・遠山のかけひをつたふ鹿の音もともになかるゝ水のしら浪 (23)

遠山の五文字いひならはさすや。鹿のねのかけひをつたふ、ことの外の事にや。鹿の音のなかるゝもかけひに白波もい
かゝ侍へき。風情をこのむ心よりかやうにいてきけるなるへし。

【校異】①「・」なし (宮書)

・夜半になく鹿のねとをす板間より月かけなからふく嵐哉 (24)

鹿の音とをすいたま、あるへからすや。吹嵐かなもすてに禁せらるゝ詞にこそ。たゝ任雅意之条、後人の心なるへきを
はかりよめる也。

【校異】①「・」なし (宮書)

・いく夜月わか衣^{コロモ}手にかけなれぬゝれて物おもふ有明の床 (25)

ぬれて物おもふもつゝきよろしからず。有明の床又同。上句も幽玄ならずや。

【校異】①「・」なし（宮書）
①衣—衣（宮書）

・みよしのゝ秋冷しき夕暮はすゝ吹嶺に嵐立なり（26）

みよしのゝ秋もことなる事なくて如何。秋すましましきもよろしからず。下句すゝ吹風と侍へきをふくといひて又嵐たつといへるいかにそや。すゝふく風を身にしめてをとりそこなへるにこそ。

【校異】①「・」なし（宮書）
②なくて—ならて（宮書）

・秋そかし露のよすかに風散て月吹よひの袖のかたしき（27）

五もしも先よろしからず。風ちりて又いかにそや。月吹よひことに聞よろしからず。

【書込】①北・片敷の袖と侍ランヲ又サカサマニヨメリ

【校異】①「・」なし（宮書）

・下葉おちふみ分かたき蜚かならず声に秋は暮つゝ（28）

桐のはもふみわけかたくをかやうにとりそこなへる事くちおしくこそ。ふみ分かたききりくす以外にこそ侍れ。下句もさまよろしからず。

【校異】①「・」なし（宮書）

・をき初る籬の菊のかことたになかはゝ霜の下そめそうき（29）

菊のかこと、きゝにくゝ侍るうへ、下句の下染、菊にいひなれてもきこえず。惣のことはり又たゝしからず。

【校異】①「・」なし（宮書）

・ゆく秋はこよひいなはの山なりとやすらへ草の枕結ひて (30)

行秋といひて又こよひいなはといふも同心也。山なりとこいへるも詞てつゝにてかたこと^①のやうにや侍らん。又秋の草枕むすはむ事こと過侍るにや。

【書込】①・氏云、たのめすは人をまつちの山なりとねなまし物をいさよひの月トアルハ可然ツゝキ也

【校異】①「・」なし (宮書)

①・氏云、たのめすは―氏云、たのめすは (宮書)

・山は冬残るともなきひと村のにしきもあたに嵐ふくなり (31)

山は冬とをけるもいかにそや。此哥は・から錦秋のかたみやたつた山ちりあへぬ枝に嵐吹也・此哥をとれり。大かたこれ^①は心聞えて未来記まてはいかゝと覺侍れとあまりに錦の縁なくや。哥はえんの詞などにてこそ詞もやさしくなるやうの事侍れ。されはかやうなるはよろしからず。さなから又本哥に別の事なし。

【校異】②引用歌前後の「・」ともになし (宮書)

・道芝や霜かれはてし跡やいつれ誰にとはたのおもかはりして (32)

道芝やといひあとやいつれといへる、かしましくや。さ衣に尋^{ツク}へき草の原さへ霜かれて誰にとはまし道芝の露。此哥をとれりと見ゆ。誰にとは田、事の外秀句見くるしくや。

【校異】①「・」なし (宮書)

・風わたる蘆の枯はにとたゆ也難波の春の夢のうき橋 (33)

西行か名哥をさなからとりて夢のうき橋をあしの枯はにかくる事、おもしろくあらんとの心かへりて見くるしくや侍らん。異風のかきりなるにや。

【校異】①「・」なし (宮書)

・夜たゝなく波まのちとりしほ風に吹かへさるゝうらのはつしま (34)

よたゝなくもふるくは侍れとつねならぬ詞也。なみまの千鳥のまの字又如何。吹かへさるゝ浦のはつ嶋とつゝくはくすはなどのやうにきこゆる。さまいひおほせられぬ事にこそ。うらのはつしまもつきなくや。古き哥を思へきことはかやうにあしくつゝけ侍らんとにはあらず。先賢のをしへをいかにも了知すへき事にこそ。

【書込】①ニコル成(右傍) ①スム也終夜ノ心也用(左傍)

【校異】①「・」なし(宮書)

・さえくるゝすさきにたてるさきたまの津にをる舟も氷とちつゝ (35)

さきたまの津は名所也。しかるをすさきにたてるといへるは驚にとりなしにや。津にをる舟、万葉にみさこゐるすにをる舟なとよみ侍れと聞よろしからず。古躰ならんとはきゝにくき事をとり出、めつらしからんとはいひにくき秀句をこのむことをいましめんのため也。

【書込】①ニコル氏(左傍) ②カミ山・さき玉の津にをる舟の風をいたみつなはたゆともことなたえそね(行間) ③ガ九・見

武蔵小崎沼鴨フシシ作哥・前玉之小崎乃沼鴨サキタマノコサキノシノ曾翼霧ソノ(行間)

【校異】①「・」なし(宮書) ③見武蔵小崎沼鴨フシシ一見武蔵小崎沼鴨フシシ(宮書) ③小崎乃沼コサキノシノ一見小崎乃沼コサキノシノ(宮書)

・雪白し暁ふかくいるそのに千里の月のほのくの山 (36)

上下共朗詠の詩を詮とせり。但さやうの事もたゝそのまゝなるはよろしからず。哥によりてそのさまことはりあるをよろしとはいふへくや。ほのくの山、例の事也。かたくつゝしむへきにこそ。

【書込】①・暁入ハ梁王之苑リョウワノノ雪満ユキミツ郡山ノ夜登ハ庾公之楼コノ月明ツキアカリ千里ミユウリョウ(行間)

【校異】①「・」なし(宮書)

・わたつ海のあまのまくかた久かたの空ふる雪をかかねてそしく (37)

まくなたの事六百番にさまくの事あり。^① までかたにて待へし。それを猶まくなといへるもをしたる心にや。久かたとつゝく事まことに入ほかの重詞也。空ふる雪もよろしからず。たゝ小智のさまたけあらは也。

【書込】^① 伊勢の海のあまのまてかたいたまなみならへにける身をそうらむる英明（行間）

【校異】①「・」なし（宮書）
①集付なし（宮書）

・白雪もふりつむかのゝ道たえてけふこぬ人をまつの下をれ（38）

此第二句よみもとかれず。下句の松の下折、雪にもさもや侍らんなれといひつゝけてさらにそのよしなし。ふか^①（く）これを思ふべきにこそ。

【書込】①・異本 正家卿 待人の麓の道やたえぬらん軒はの松に雪おもる也ト云哥ヲウラヤミテカヤウニ詠ヘキノイサメ也（行間）

【校異】①「・」なし（宮書）
②ふか^①（く）——ふかく（宮書）
① 正家卿 待人の——正家卿 待人の（宮書）

・里はあれぬとはぬなかめの雪のうちをたかならはしと暮はつる年（39）

とはぬなかめの雪のうち、詞つゝきそのことはり見えず。下句の心又そのことはり明ならず。いひつゝけてみるにする^②くときこえさる事第一きらふことにや侍らん。

【書込】①・異本 里はあれぬむなしき床のあたりまで身はならはしの秋風そふくヲトレル也（行間）

レトモ第二ノ句ヨリシテ悪ケレバソレモカヒナシ（行間）

【校異】①「・」なし（宮書）
②悪ケレバ——濁点を朱で記す（底本）

・ふる山の千ひろの松のたかみそきこのゆふつけてつもる白雪（40）

ふる山のとていへる名所にや。又如何。古今たかみそきゆふつけとりかから衣といふ哥をとりてし出るとみゆ。松のたかみそき、心えず。一向無心所着のさまとやいふへからむ。^①

【書込】①北 此ゆふつけて学ヒヨムヘカラス（余白）

【校異】①「・」なし（宮書）

・夏虫を袖につゝめるたまゆらもいはゝや物を人にしられて（41）

寂蓮か袖に螢をつゝみてもといへるをめつらしくとりかへんとてつくりいへるさまなり。上手の哥を取かへんとせはかならずかやうに侍るへき物也。学者よく思へきのいさめ也。夏虫を袖につゝめるといひて又玉ゆらもなといへる、返々さまあしき秀句なるへし。

・かけはかりみうらさきなるねつこ草下にもえつゝ年はへにつゝ（42）

万葉に芝付^①のみうらさきなるねつこ草といふ哥あり。これをとり。先にもいへることく万葉は優にたけたかきをこひねかふへきを、かゝる異相の物をとり出ること後生のいたす所也。此草いかなる物ともしらす。これを尋へし。但又何にかはせん。

【書込】①シバツケ氏（右傍）

②ニコル氏（右傍）

③・芝付乃御宇良佐伎奈流根都古具佐安比見受安良婆安礼古悲米夜母

万十郎

（行間）

④・異本・年はへにつゝもいたりて古きには有

万葉ノカ、リゾトテカヤウニ悪ク云ナスベキノイサメ也（行間）

【校異】①「・」なし（宮書）

③とり出ることとり出ること（宮書）

・わか恋は大やかはらのいはひつらてにはひけともぬるよしもなし（43）

万葉にいりまちのおほや川原のいはひつらひかはぬるゝわになたえそね・上野のかほやかぬまのいはひつらひかはぬれつゝあをなたえそね・此二首いりまちは人間の郡の道にや。かほやか沼も名所也。いづれも水辺の草とみゆ。なかくてひく物にや。ぬるゝといふもぬれつゝといふも、心はたとひぬるゝとも我になたえそといふ心也。かゝる哥本哥もさらに優ならず。詮なくや。ましてこれを取て詮とすること心のほとも見え侍へし。此おほや河原もあつまの名所とみゆ。ぬるゝをぬめる心によするなるへし。返々かゝる心よしなしことにや。

【書込】①ニコル氏（左傍）

【校異】1「・」なし（宮書）

2いりまぢー清点（・）及び濁点（・・）は朱書（底本・宮書）

2、3引用歌の前後の「・」

ともになし（宮書）

4ぬれつゝといふもぬれつゝいふ（宮書）

・恋のみちふむしつけこか手玉なくしほる涙やふちとなる瀧（44）

しつけこかといへる人のことにや。おほつかなし。手玉なくとは機なとをるに手玉なと云事あるにや。たゝひまなくおつる涙とみゆ。淵となる瀧なととまるさま更に哥にはあらすこそ侍れ。

【校異】1「・」なし（宮書）

・なかき夜も明なんとするかねこともまたつきなくに袖ぬらす空（45）

明なんとするかねこと、家隆卿哥に猶長き夜の月を残れると侍をとれるにや。三の句にうつる所ことにみゝにたち侍る也。またつきなくにもふるきにはあれと聞よからす。

【書込】①新註限りあれは明なんとする鐘の音に猶長き夜の月が残れる（行間） ②・異本 むつこともまたつきなくにヲトレリ。

【校異】1「・」なし（宮書）

2侍を侍るを（宮書）

3ふるきふかき（宮書）

・風さはくゆらの湊をこく舟のうきて物思ふ身そゆくゑなき（46）

此哥曾禰好忠か哥をさなからとれり。かやうにはゆふへからすこそ。身そ行衛なきも詞つまりてよろしからす。ゆくゑなきちきりといはんは所によりてやさしくも侍るへき也。

【校異】1「・」なし（宮書）

・人はいさ昨日の雲の跡もなくけさはきえぬの夢もはなかし（47）

家隆卿の昨日の雲をうらやみとれるとみゆ。かやうにまちかき哥ともおそれする事可有憚者也。けさはきえぬのなとさらにきゝもならはぬ詞にや。

【校異】①「・」なし（宮書）

・夕^タくれはつらき嵐^{ハル}のうつの山おもひをたれにつたの下道^{（48）}
定家卿^①のつらき嵐^{ハル}をこひねかふさまにや。不可然^{（49）}。下句おもひをたれにつたの下道^{（50）}、つたへんの心にや。ことたらすこそ。

【書込】①あちきなくつらき嵐^{ハル}のこゑもうし（左傍）

【校異】①「・」なし（宮書）

・あた人を松に嵐^{ハル}の吹かねて色にみすへきことのはもなし（49）

これは・松を時雨の染かねてをうらやみとれるさま也。吹かねてことの外にこそ侍れ。

【校異】①「・」なし（宮書）②引用歌の前の「・」なし（宮書）

・うらかれの庭の村萩秋^{アキ}くれて人の心の跡の山かせ（50）

慈鎮^{ニギハヤヒ}和尚家隆卿^{ニギハヤヒ}彼両首^{ニギハヤヒ}を上下に其まゝをけるさまのあまりにや。惣てふるき哥をとるも其時代又故実侍るなるへし。まして此比の哥をみなとりよむへき。人の心をいましめむと也。学者これを恥思へき事にこそ。①②③

【書込】①北二首ノ本哥ラトレル名哥^{ナカ}後鳥羽院^{ゴトウ}・旅衣きつくなれゆく月やあらぬ春や都とかすむ夜の空（余白）②・伊利麻

治能^{チノ}於保屋^{ホヤ}我波良^{ワラ}能伊波^{エバ}為都良^{ツラ}比可婆^{ヒカハ}奴流^{ヌル}奴流^{ヌル}和尔奈多^{ワニナタ}要會^{ヨウエ}禰^ネ（余白）③異本・此五十首末代の哥よみかやうに詞をつ

くりなし如此建立すへきの由也建保建仁の比の哥を取用て如此よめる事不可然一句をたに制の詞とて嫌事になれるにや能々作意の詮を可工夫之教也（余白）

【校異】①「・」なし（宮書）②「麻」「於」「保」「屋」「波」「多」「要」「曾」「称」の左傍に清点（・・）、「治」「我」「婆」の

左傍に濁点（・・）を朱書し、「都」の傍訓「ツ」の濁点も朱書する（底本・宮書）②「能」にも濁点（朱）を加える（宮

書）③取用て如此―取用如此（宮書）

雨中吟

此十七首は未来記同前には侍れと、別に此名を雨中吟と号する事、尤可得其意子細在之。此書は名の外に躰なく、躰の外に名なしといへり。躰とは哥の風躰也。此躰を雨声暗明の躰とも云り。風躰のあしきをしらしめむのをしへなり。たとへは霖雨物むつかしくうちおほふ様にて、くらきかとみれば又あかくなり、明なりと見れば又暗くなりて、もうくとしていひしらす。こゝちもたとくしく、山川草木の気色、鳥の声なともしほれたるやうの時あり。さやうの折ふしはあらぬ愁もそひて物いまくしき心ある也。此十七首の哥みな心たとくしく、理見えす、思とくもとかれす、たまぐ聞ゆるやうなるも心詞とをらす、むすほるやうにあるを、雨中の心にととて雨中吟と云る也。かならず雨中をあしきといふにはあらず。さひしく物あはれなる心もあり。又おもしろき心も雨にはある物也。又かなしきさまをよみてそれか感にもなる事あり。詩にも蘆山雨夜草庵中なといふも心あるさま也。又俊成卿哥に・昔をおもふ草の庵のよるの雨に涙なそへそ山時鳥・定家卿哥に・春雨よ木葉みたれしむら時雨それもまきるゝかたはありけり。これも春の雨のさひしさいたりたるか感となれる也。たと雨のふりさまにて、あはれにも、おもしろくも、又心伸くもりはてゝ物心くるしくいまはしきやうの事もあり。風躰のあしき哥を霖雨の中の心にととたる物也。後生の人はみな詞をめつらしく、心をふかくと案する所、正路にはなくして首尾せぬ所あるへきをいましめんのをしへなり。返く哥は風躰のあしきを嫌事也。数を十七首にさためらるゝ事は太子の御憲法をかたとる儀にや。

【書込】①・氏云亡父ナトハ未来記ヨリモ雨中吟ハ悪キ躰ト也（行間）

②・氏云喜雨亭記アル也又東坡十・飲湖上初晴後

雨・水光激瀾晴方好・山色空濛雨亦奇・欲把西湖比西子・淡粧濃抹總相宜（行間）

【校異】③雨声暗明―雨声暗明（宮書）

⑤気色―気色（宮書）

②朱による傍線・添仮名なし（宮書）

・またれゆく光もをそき月よりも雨にきこゆる萩の音かな（一）

此作意はもしまたるゝ月のためよりも雨に萩のをとのきこゆるかなしきとよめるにや。たとへはさにこそ侍らめと更にたしかにもきこえず。ことに下句の様うれはしき躰也。萩にはいくたひも風をよまむ事、正道の理也。それをさしを

きて雨にてめつらしくせんとするかあしき也。定家卿の近代の秀哥の詞に、後学の人の哥はやすかるへきをちかへ、はなれたることをつゝけんとする故に、哥さまよろしからぬよしをのたまへる也。尤大切のをしへ也。萩の雨、たゝその心也。

【校異】①「・」なし（宮書）

・^{風秋上}うちしめり薄のうれはをもりつゝ西ふく風になひく村雨（2）

先すゝきのうれはよろしからず。大かた一むら薄などにむら雨の露かゝりたるさまなどは其興侍るへきを、しめりはてゝおれふしたるやうなるころ、あらゝと西風の吹たらんは物うらめしく、愁わひたるやうにこそ侍へけれ。かやうに哥を案しよめらん事をいましむるの道也。猶此躰は詩に乱たる世の声は怨以怒りといふ心也。此哥いまはしき哥の風躰也。

【書込】①・氏云 暁風残月入華清ナトノ躰也（行間）

【校異】①「・」なし（宮書）

・夢くらきしらぬ外山の鹿の声さむる枕の雨にたくひて（3）

此哥の心さしは夢たにさたかならぬ心ちするに、いつくともなき鹿のねきこゆるさまにや。あはれにもあるへき事を五文字の夢くらきしらぬとやまとつゝけるかあしき也。夢くらきといふ詞さらに其理なし。さむる枕といふも何かさむるそなときこゆるやうなり。一首を吟して風躰のあしきを思しるへきとぞ。いつれの哥も詠吟して其心を分別すへき物也。されはしたてによりて異風にも正風にもなるへきにこそ。世上の人のさまも風躰あしければよろしき心をもちうしなふ物にこそ侍れ。学者その心をおもふへきの儀也。

【校異】①「・」なし（宮書）
⑥物にこそ―物もこそ（宮書）

・秋はゆく雨は雫にふりしめて袖のしりけるたくれの空（4）

雨はしづくにふりしめては涙ともきこえず。句つゝきことの外に聞にくゝや。袖のしりけるも袖に思ひのみゆるにてこそ侍らめと、いひやうのあしきによりきゝにくゝなる也。一首を吟すれば物わひしきさまにこそ。

【書込】①・異本・心ハイカニモ事ニアタリテ悲キサマヲヨム事ハアル事也 詞ヲスルくツツカヒテ心ハシミくツシ立ンコソ感モ侍ラメ (行間)

【校異】①「」なし (宮書)

・いく里の雲に心のかよふらんうかふとかこつ月は雨にて (5)

まついく里の雲に心のといてへるにつかすや侍らん。うかふとかこつことの外にこそ。月は雨にてととまるもふつきりにや。惣の心わきかたくて物むつかし。作意にて人の心も見ゆる物とこそ古今にも見え侍れ。

【書込】①・異本・哥ノ心ハ月ヲ見テアル事トモノ心ニウカブトカコチハ雨ニテ行衛ナキ雲ニノミ心ノ通フトヨメルニヤ オボツカナシ (行間)

【校異】①「」なし (宮書)

①ウカブトウカフト (宮書)

①オボツカナシーオホツカナシ (宮書)

・くれの秋階にしたゝる夜の雨草の庵のうぢならねとも (6)

まつ暮の秋といへるつまりたる五文字也。はしにしたゝるは詩の心な (か) らつきなくとり出たるもの也。一二の句つゝきよろしからず。下句又更に其感なくこそ侍れ。あはれふかくとはするやうなれと、あらひてことの外にや侍らむ。

【書込】①・三秋而宮漏正長空階雨滴・万里而郷園何在落葉窓深 (落葉 誤読) (行間) ②・廬山雨夜草庵中 (行間)

【校異】①「」なし (宮書)

②な (か) らーなから (宮書)

①「」は「三秋」の前にあるのみ (宮書)

・をやみせず雨夜の空になく涙もりぬしほりぬせく方もなし (7)

此哥のことはつかひしほり過ぎて感なくこそ侍れ。下句殊に以外にや。

【書込】①・異本・怨以怒レルコトハリ也 (行間)

【校異】①「・」なし（宮書）

・星もなく雲間も見えぬ雨の夜に猶もたるゝは山のはの空（8）

此哥まことに無心所着といひつへし。又躰愁はしくや。こゝまで八首雨を詠せる心は雨中吟の名をかたるとる儀也。此末雨ならぬ哥も、心詞たゞしからて物のよしもきこえ侍らぬは雨中の様也。前にいへることくに、無分別なる心を雨中のたとへとしるへし。是より末九首みな其理きこえず。あやめもわかぬ哥とも也。其を雨中のたとへと覚悟すへき物とぞ。

【書込】①・異本・またるゝ八月ノ事ニヤオボツカナシ（行間） ②北題ヲマワシテヨムナト聞テマワス様ヲモ不習大略如此也（行間）

【校異】①「・」なし（宮書）

・つれく〜と山路露けき秋風に日影ひとつにかよふ春かな（9）

二三句はすさましき様也。下句はあたゝかなる様也。惣は春に秋をよひて秋に春を思てよめる事は常の事也。させる感なくてよまむ事無曲也。此哥露けき山路に秋風吹たらんはさむさのいたりたる儀也。さありと思へは日影はぬるくとしたるさま也。俗言「そこさむくうはあつきなといひて、物むつかしき事のあるに似たり。詞つかひ句のうつりなとはさしてとかなし。只さまのあしきにより物わひしくきこゆる也。なを此哥は上下のいひやうとすればかゝりといふさまにや。雨声暗明のたとへにかなへり。

【校異】①「・」なし（宮書） ④俗言「俗言に（宮書）」

・そよくれぬならの木葉に風吹て星出る空のうす雲のかけ（10）

五もしまつ心ゆかす。ならの木葉も如何。下句おもしろけにいひなさんとはしたてたるにや。但ほしもつきなくこそ侍れ。一首を吟しつゝけて見るに風躰ことの外にや侍らむ。

【校異】①「・」なし（宮書）

・たへてこそ山のふかきはなかつれ秋に侘ぬる長き夜の霜 (11)

上句すゑにいかなる事あらんと思へは、長き夜の霜におもひわひたるさまさして詮なし。一首をいひつゝくれは其興もあはれもなし。たゞ山ふかく居て愁へしほたれつゝかひなき心のさま雨中吟也。たゞ哥のさまはれくしからぬを嫌也。

【校異】①「・」なし (宮書)

・峯の雲麓の霧に色くれてそらも心も秋のまつ風 (12)

上句みな雨中のさま也。色くれてしかるへからさること葉とそ侍し。秋の松風もよろしからすこそ。かなしきさまはいへと心はさらにあはれならず。惣て此抄にいへることは一ふしあらんといひいて又心の興あらんとする所、相構かやうに詠すへからさるよし代々の庭訓也。

【校異】①「・」なし (宮書) ①そら—そら (宮書)

・秋ならす物をおもはぬ空までも契よしなき夕暮のかね (13)

秋にもあらす物おもふにもあらすしては何事かなしくも侍らん。又なにの契ともしらすこそ侍れ。夕ぐれの鐘もあはれる物なれと、詞ひとつにとりこみておもしろからず。哥さま尤いまはしき躰也。

【校異】①「・」なし (宮書) ③とりこみて—とりこえて (宮書)

・とはぬうし忘れぬかなし鐘のねにたのめもなれぬ明方の夢 (14)

上句の詞つかひものゝかたそはのやうにきこゆるかあしき也。鐘のねもいひならはすこそ。ねもしのちかき故に聞にくき也。下句も心あらはならず。一首の建立又理なし。雨中吟の至極也。

【校異】①「・」なし (宮書)

・忘ぬらんうらめしと思ひおもふとても待へきにあらすとはんともいはし (15)

此哥句ことに文字をあます事詮なくや。下句無下のたゝ詞也。此哥を愚秘とやらんいへる物に定家卿の自讃の哥といへり。いかてかは自讃の哥を此抄にのせらるへき。彼愚秘、桐火桶の類にや。

【校異】①「・」なし (宮書)

②愚秘—愚鬼 (宮書)

・いへはたゝまたうたゝねの袖ながら枕もしろき軒のひまゝ (16)

これは何事をよめりとも見えず。つゝきは恋の哥などゝ見れば又さも侍らす。袖^①なからといひて其末見えず。五文字又わさとかましくや。惣の理もたしかならず。是又雨中吟の心也。

【書込】①・異本・夏ノ夜ナトノ事ナラデハオボツカナシ 今案イカニモ寝ヌル事ニスケル物ノ心ト見ユ (行間)

【校異】①「・」なし (宮書)

【校異】①今案—・今案 (宮書)

・わけもせし尋ねもゆかしこよひなといく田のをゝ木枯の風 (17)

一二の句おもはしからず。心は生田杜とよますして小野といへるも後学のともからの心をいへる哥也。木からの風又制のことは也。心をかすかに詞をめつらしくせんとする儀にや。此二はまことにさることなれと、其に善悪あるへきにや侍らん。此抄の奥書に云。

此風鉢をさかりにこのみよまん時、哥の道はやすたるへき世いたれりとなんしるへし。努々まなふへからさる鉢也。此比もかやうのすかたをのつかから見え侍かし。仍後学のために記しとむる所也。

此旨学者能思慮あるへき者歟。①

【書込】①・異本・前ノ五十首ハメヅラシキ詞フネカヒ新キ句ノツゝキヲ思フ 是ニヨリテ人々ノ名哥ヲヌスミ取也・此十七首ハサマ心ヲ幽ニイヒ出スヘキ心ヲコメタル哥ヲ面白シトテ末代ノ哥ヨミノ詠ヘキ事ヲカミテヨメル也 只心ハナラク詞ハエンナラ

ント思ベシ (改行)

【校異】①「・」なし (宮書)

①メヅラシキ—メヅラシキ (宮書)

①面白シトテ—面白トテ (宮書)

【底本識語】

右宗祇法師聞書也東常緣一
覽之処称神妙之由号遠情

称自書銘与之^{云々}此本則所押
也先年講談之後予聊雖有抄
出之事重而借請此本今書写
者也

明志四年三月十八日 在判

^{禁裏御本云}
以逍遙院自筆之本写者也

文祿四年二月廿日

自神武百数代末孫——^{和仁廿五才}